3 月 24 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　18：1 – 40

「あなたが言っていることです」

3 月 17 日に行われたロシア大統領選挙で、現職のプーチン氏が通算 5 期目の当選を果たしました。これまですでに 24 年も政治の実権を握ってきたプーチン氏ですが、これからさらに 6 年間、ロシアを統治することになります。自らの成功のために権力を求め、戦争をも厭わない姿は、同じイエスをキリストと仰ぐ人間なのだろうか、と思わされることもあります。それとも、彼自身はこの一連の歩みを「天に富を積んでいる」(マタイによる福音書 6:20)と思っているのだろうか、とも。

総督ピラトが「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。」(ヨハネによる福音書 18:38)と言った時、ユダヤ人たちはイエスが処刑されることを願いました。何の罪もないイエスではなく、強盗という社会的には恐怖しか与えないはずのバラバの釈放を願いました(「すると、彼らは、『その男ではない。バラバを』と大声で言い返した。バラバは強盗であった。」ヨハネによる福音書 18:40)。

自分たちの価値観が揺さぶられるのが怖かったのです。だから、自分から神の下を離れてしまう結果となったのです(「自分の舌がつまずきのもとになり／見る人は皆、頭を振って侮るでしょう。」詩編 64:9)。

この場面、いつも思うことがあります。神は全能の神であられるのだから、イエスを十字架にかけることを止めることができたはずでは、と。事実、アブラハムが独り子イサクを神に献げようとした時、それを止められたではないか、と(「御使いは言った。『その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。』」創世記 22:12)。しかし、神はそのような人間的な思いとは関係なく、自らの独り子であるイエスを十字架にかけられることを厭われません。

人間的な思い、価値観という点から見れば、イエスを釈放するかどうかを問うたピラトもそこから自由ではありません。イエスの、そして神の真の目的など知るはずもなく、「王」すなわち支配者こそが究極の栄華だと思っています。だからピラトは「お前がユダヤ人の王なのか」(ヨハネによる福音書 18:33)と問いました。イエスが地上での成功を目的としていると思っているからです。

「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。」(ヨハネによる福音書 18:37)

イエスは人間的な価値観を根底から崩そうとされます。

トルストイの短編小説に「人にはどれほどの土地がいるか」(1886 年)があります。農民パホームは人の良いバシキール人から「日没までに行って戻ってくることができた土地を安く売ってあげる」と言われて、一日中歩き回り、何とか日没までに戻ってくるのですが、疲れて息絶えてしまいます。パホームの使用人は彼の遺体を埋葬しますが、それはたった 6 フィート(約 182cm)だけでした。

「起きて半畳寝て一畳」と清貧を勧めているのではありません。とかく自分の利益だけを追い求める姿が、神の前に正しいのかと問うています。神から十分に恵みを与えられながら、それを生かす道ではなく、「もっと、もっと」と焦るあまり、自らその恵みを手放そうとすることを戒めているのです。

神が独り子を十字架へと向かわせるのはなぜでしょうか。それは、地上での価値観を覆すためでしょう。敗北としか見えない十字架刑こそが、神の救いの始まりであることを示すためでもあります。

そして、古い地上の価値観を身に帯びて、イエスは十字架にかけられます。古い価値観を滅ぼして、新しい道を開くために(「イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通って、新しい生きた道をわたしたちのために開いてくださったのです。」ヘブライ人への手紙 10:20)。

私たちは改めて、自分を縛り付けている価値観と向き合わねばなりません。「それはあなたが言っていることです」とのイエスの言葉が私たちにも向けられています。「人の振り見て我が振り直せ。」十字架の前に頭を垂れて、神に従い直したいと思うのです。